100年の時を超えた助け合いの輪

いよいよ明日で第２クォーターも終わり。
本日は、英語の学習発表会。
そして最終日となる明日は、百人一首大会なども予定しています。
おそらく、今日も明日も子どもたちの「ひたむきな姿」や「積み重ねてきた姿」がたくさん見られることと思います。
ぜひ、その成長した姿をともに喜ぶことができれば嬉しいなぁと感じているところです。
本日の学習発表会には多くのお家の方がご参加されることと思いますが、明日 29 日の２時間目と３時間目も同じくおすすめです。
道徳と百人一首の大会を行うことになっていますので、もしご都合つく方がおられましたらぜひ見学にお越しください。

さて、一昨日の社会の時間は、「災害」を学ぶための素材として、以下の勉強を行いました。
私は、常にどの教科でも言っているのですが、その教科を通して「どんな学びを得て、どのように人生を歩んでいくか」という目的こそが大切だと思っています。
「〇〇と思うな人生と思え」という言葉がありますが、その〇〇には国語が入ったり社会が入ったり、漢字や計算が入ったりするということです。
今回の災害の学習も同じです。
「この災害って大変だよね」という平板な知識だけを得ればそれでいいのではなく、その学びがどのように生きていくかという目的こそが大切です。

私は、社会科の学習を通して、自分の国を誇りに思える子供に育ってほしいと願っています。
私たちには、誇りに思える先人がたくさんいます。
そうした人たちの所業を通して、日本人の気概を伝えたいと思っています。
それは、「偉人」として名をはせた人があれば、名は残っていなくとも素晴らしい足跡を残した方々もいます。
そこで、火曜日は次のように授業を行いました。

今から約４０年前。
国境紛争が続いていたイラクとイランは戦争を始めました。
この頃、イランの首都テヘランには、世界の先進国が出資した会社が２２０社以上ありました。
もちろん日本人も大勢います。
１９８５年になると、テヘランの北部が爆撃されるようになり、不安が広がりました。
そして、３月１８日、イラク大統領サダム・フセインは次のような声明を出しました。

イランの上空は航行禁止とする。３月２０日午前２時以降、イラン上空を航行する全ての航空機は攻撃対象になる。

戦争にも、「ルール」が存在します。
その中の一つに、「民間人は攻撃してはならない」というものがあります。
武器を持った兵隊同士の戦いが、戦争の原則だからです。
しかし、フセイン大統領はこれを無視。

つまり、民間人が乗る航空機も攻撃対象となったのです。
しかもその期限は２日後。
この時点で、テヘランに在住する日本人はおよそ５００人でした。
現地の人たちはどうしたでしょう。
子どもたちに、意見を問いました。
「すぐに逃げようとしたと思います。」
日本の外務省はただちに引き揚げ用のチャーター機を手配し始めようとした時です。
あろうことか今度はイランがイラクの首都バグダッドへのミサイル爆撃を始めてしまいました。
事態はますます悪化します。
バグダッドでは２人の日本人が負傷してしまいました。
日本人は、藁にもすがる思いで、飛行機を予約します。
しかし、外国の航空会社の旅客機はあてになりませんでした。
自分の国の人達を優先して載せるからです。
アメリカ人はアメリカの飛行機に。
イギリス人はイギリスの飛行機に。
必死の思いで予約した日本人は、はじき出されてしまいました。
外国の力はもう頼りにできません。
こうなれば、頼みの綱は自分の国だけです。
外務省からの要請を受け、日本航空は、救援のための旅客機を用意しました。
しかし、その飛行機は飛び立つことはありませんでした。
タイムリミットに間に合わないことが分かり、「帰る際の安全が保障されない」とテヘランへ飛ぶのを諦めざるをえなかったのです。

テヘランに残された日本人はどんなことを考えたでしょう。

「何とか逃げる事はできないのか。」
「誰か助けて。」
「飛行機以外の方法なら・・・、」
「もうおしまいだ。」
打開策も見つからず、窮地に立たされてしまった時でした。
タイムリミット前日の午前１１時、現地のトルコ大使館から日本大使館へ、突如次のような連絡が入ったのです。

「トルコ航空機の２００席を割り当てます。利用して下さい。」

航空機は２便用意され、脱出希望の２１５人は土壇場でテヘランから脱出することができました。

イラク軍による攻撃開始の１時間前の出来事でした。

まさに、ギリギリのタイミング。

危機一髪の事態でした。

感想を聞きました。

「トルコの人は優しいです。」

「驚きました。」

「なんで助けてくれたんだろう。」

（トルコ大使館）

脱出希望者ほぼ全員がイランを出国。
トルコ航空機で215人。

トルコが日本人を救った理由は一体何なのか。

実は、当時日本政府もマスコミも、トルコが命がけで日本人を救ってくれた理由が分かりませんでした。

日本全体が「なぜ？」と思っていたのです。

教室全体にも「なぜ？」が浮かんでいる状態で、次に進みました。

イランイラク戦争からしばらくたった後日のことです。

その理由と思われる記事が、新聞にて報じられました。

駐日トルコ大使が、平成１３年５月の新聞で次のように述べています。

「特別機を派遣した理由の１つがトルコ人の親日感情でした。その原点となったのは、１８９０年のエルトゥールル号の海難事件です。」

エルトゥールル号事件とは、こうです。

トルコの使節団が、軍艦エルトゥールル号で日本を訪れた時です。

日本が、江戸時代から新しい明治時代へと歩みを進めたばかりの頃でした。

あろうことか、船は台風の直撃にあい、トルコ使節団６６０名を乗せたエルトゥールル号は、沈没してしまいました。

場所は、和歌山県沖。

その事件の様子は、６年生の道徳教科書にも載っています。

もちろん教科書以外にも、当時の様子を伝えた文章は様々あります。

月刊誌『生命の光』にも当時の姿が載せられています。

少し長くなりますが、紹介します。

和歌山県の南端に大島がある。その島の東には、灯台がある。石造りでは日本でいちばん古い。明治３年（１８７０年）にできた樫野崎灯台。今も断崖の上に立っている。びゅわーんびゅわーん、猛烈な風が灯台を打つ。どどどーんどどどーん。波が激しく断崖を打つ。台風が大島を襲った。明治２３年９月１６日の夜であった。

午後九時ごろ、どどかーんと、風と波をつんざいて、真っ暗な海のほうから音がした。

灯台守（通信技手）は、はっきりとその爆発音を聞いた。

「何か大変なことが起こらなければいいが」

灯台守は胸騒ぎがした。しかし、風と、岩に打ちつける波の音以外は、もう、何も聞こえなかった。このとき、台風で進退の自由を失った木造軍艦が、灯台のほうに押し流されてきた。全長七十六メートルもある船。しかしまるで板切れのように、風と波 の力でどんどん近づいてくる。

あぶない！灯台のある断崖の下は「魔の船甲羅」と呼ばれていて、海面には、 岩がにょきにょき出ている。

ぐうぐうわーん、ばりばり、ばりばりばり。船は真っ二つに裂けた。その瞬間、エンジンに海水が入り、大爆発が起きた。 この爆発音を灯台守が聞い

たのだった。
　乗組員は海に放り出され、波にさらわれた。またある者は自ら脱出した。真っ暗な荒れ狂う海。どうすることもできない。波に運ばれるままだった。そして、 岩にたたきつけられた。 一人の水兵が、海に放り出された。大波にさらわれて、岩にぶつかった。
　真っ暗な中で、灯台の光が見えた。
　「あそこに行けば、人がいるに違いない」
　そう思うと、急に力が湧いてきた。四十メートルほどの崖をよじ登り、ようやく灯台にたどり着いたのだった。灯台守はこの人を見て驚いた。服がもぎ取られ、ほとんど裸同然であった。顔から血が流れ、全身は傷だらけ、ところどころ真っ黒にはれあがっていた。灯台守は、
　この人が海で遭難したことはすぐわかった。
　「あなたのお国はどこですか」
　「・・・・・・」
　言葉が通じなかった。それで「万国信号音」を見せて、初めてこの人はトルコ人であること、船はトルコ軍艦であることを知った。また、身振りで、多くの 乗組員が海に投げ出されたことがわかった。
　「この乗組員たちを救うには人手が要る」傷ついた水兵に応急手当てをしながら灯台守はそう考えた。
　「樫野の人たちに知らせよう」
　灯台からいちばん近い、樫野の村に向かって駆けだした。電灯もない真っ暗な夜道。人が一人やっと通れる道。灯台守は樫野の人たちに急を告げた。灯台にもどると、十人ほどのトルコ人がいた。全員傷だらけであった。助けを求めて、みんな崖をよじ登ってきたのだった。
　この当時、樫野には五十軒ばかりの家があった。船が遭難したとの知らせを聞いた男たちは、総出で岩場の海岸に下りた。だんだん空が白んでくると、海面にはおびただしい船の破片と遺体が見えた。目をそむけたくなる光景であった。
　村の男たちは泣いた。遠い外国から来て、日本で死んでいく。男たちは胸が張り裂けそうになった。
　「一人でも多く救ってあげたい」
　しかし、大多数は動かなかった。一人の男が叫ぶ。
　「息があるぞ!」
　だが触ってみると、ほとんど体温を感じない。村の男たちは、自分たちも

裸になって、乗組員を抱き起こした。自分の体温で彼らを温めはじめた。
「死ぬな！」
「元気を出せ！」
「生きるんだ！」
村の男たちは、我を忘れて温めていた。次々に乗組員の意識がもどった。船に乗っていた人は六百人余り。そして、助かった人は六十九名。この船の名はエルトゥールル号である。このような村落に、六十九名もの外国人が収容されたのだ。島の人たちは、生まれて初めて見る外国人を、どんなことをしても、助けてあげたかった。だが、どんどん蓄えが無くなっていく。ついに食料が尽きた。台風で漁ができなかったからである。
「もう食べさせてあげる物がない」
「どうしよう！」
一人の婦人が言う。
「にわとりが残っている」
「でも、これを食べてしまったら……」
「お天とうさまが、守ってくださるよ」
女たちはそう語りながら、最後に残ったにわとりを料理して、トルコの人に食べさせた。
こうして、トルコの人たちは、一命を取り留めたのであった。また、大島の人たちは、遺体を引き上げて、丁重に葬った。

授業では、この一部を抜粋して紹介しました。
さらに、当時の再現映像も見せました。
嵐の夜、吹き付ける暴風雨の中、大島の人たちが懸命にトルコの人たちを救おうとする映像が流れました。
子どもたちは、じっとその姿を見つめていました。
駐日トルコ大使は、次のようにも述べています。

「悲劇ではあったが、この事件は日本との民間レベルでの友好関係の始まりでもあった。この時、乗組員中６００人近くが死亡した。しかし、約７０人は地元民に救助された。手厚い看護を受け、その後、日本の船で無事トルコに帰国している。
当時日本国内では犠牲者と遺族への義援金も集められ、遭難現場付近の岬と地中海に面するトルコ南岸の双方に慰霊碑がたてられた。
エルトゥールル号遭難はトルコの歴史教科書にも掲載され、私も幼いころ

に学校で学んだ。

子どもでさえ知らない者はいないほど、歴史上重要な出来事だ。」

ここで、実際にトルコで使われている５年生の教科書を見せました。

日本人の精神性の象徴であり国花である「桜」より。
日本一の山として名高い「富士山」より。
それよりも先に、エルトゥールル号事件のことが紹介されています。
最後に、和歌山県大島の樫野地区の方の話を流しました。
トルコの人たちは体が大きく、３人４人がかりで運んだこと。
その時は台風で漁に出られず、食糧の蓄えもわずかであったこと。
浜野さんという方が、話を教えてくれました。
最後の部分をテープ起こしします。

「食料もないしねぇ。けど、自分たちはえらかったとか、他の（国の）人たちに良くしてあげたとか、そんなことを言う人は一人もいなかったねぇ。」

「みんな、一緒に帰ったかと。遠いとこに来て、みんな無事に帰ったかなぁとそればっかり心配してたね。」

私は、この部分の映像を何度も何度も見ました。
そして、一昔前の先人の姿を思い、心から誇らしい思いになりました。
自分たちがこんなことをした、どうだ立派なことをしただろう。
そうしたことを、我々の先人は大きく言いませんでした。
そして、この歴史は日本の間で語り継がれることなく、忘れ去られていったのです。（私も、23 歳になるまで知りませんでした。）

日本人がそのことを忘れたとしても、忘れなかった人たちがいます。
誰ですか？

「トルコの人たちです！」
エルトゥールル号事件が起きたのは、今から 100 年以上も前です。
遭難事故からそれだけの時間が過ぎた今も、トルコの人たちは日本人の優しさを忘れていません。
だからこそ、イラン・イラク戦争の時に、日本人を命がけで救ってくれたのです。
説明を終えると、教室は静寂に包まれました。
そして、ある子がつぶやきました。
「全部、つながってるんだ…」と。
このお話は 2015 年に映画化されました。
日本とトルコの友好 125 周年を記念して、２つの国が合作で映画を作ったのです。
タイトルを、「海難１８９０」といいます。（チャンスがあればぜひ見てみて下さい。）

実は、和歌山県串本町には、この時の慰霊碑ともにトルコ記念館が設立されています。
この授業を作るべく、私も１７年前に訪れました。
もちろんエルトゥールル号事件のことを調べる為です。
町役場に寄り、図書館に行き、最後に記念館と慰霊碑に行きました。
間もなく慰霊碑が見えてこようとした時、思わず足が止まりました。
慰霊碑の前で日本人のように手を合わせ、祈りをささげるトルコの方たちの姿があったからです。
しばらく、その姿に私は目を奪われました。
あの話は本当だったんだと、強烈に感じた瞬間でした。

ともすれば世界の国々との軋轢ばかりが報じられる中だからこそ、友好的な関係を築いてきた先人の姿を、授業で確かに伝えていきたいと思います。
それができるのが、社会科の授業です。
「災害の歴史」とは「助け合いの歴史」でもあります。
大きな災害であればあるほど、そこには手を取り合い、力を合わせる人々の姿が必ず存在します。
災害の悲惨さだけでなく、大きな苦難を先人たちがどのように乗り越えてきたのか、その助け合いの歴史もきちんと伝えていきたいと思います。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください
https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit